

資料

幼児の遊び行動に及ぼす性差, 性役割選択及び 性的ラベリングの効果

増田 公 男*

中 尾 忍**

問 題

幼児が性役割行動を獲得する際のラベリングの重要性については、多くの研究者により指摘されているが、性的ラベリングの直接的効果に関しては、これまでほとんど検討されていない (Montemayor, 1974)。Thompson (1975) のラベリング効果についての発達の観点からの考察によれば、30か月児は明確に性差を認識しているが、性的ラベルを行動指針とはせず、評価的ラベルを採用し、36か月児になって初めて性的ラベルが行動に影響を持つようになるという。こうした結果と他の性役割についての研究を照合すれば、性的ラベリングの効果は、3才以降に顕在化すると考えることができる。Montemayor (1974) は、6～8才児で男女共に性的ラベルが行動遂行に対して強い効果を及ぼすことを見出した。ラベリングという直接的な方法の他に、モデリングも性役割学習にとって重大な効果を有していると考えられるが、Masters et al. (1979) はラベリングとモデリングの2つの情報源を幼児に与え、それらの比較検証実験を施行したところ、ラベリング情報をより重視するという結果を得た。

本実験は、以上のようなラベリングの重要性に着目し、その一側面としての性的ラベリングが、被験者の性、性役割選択の水準と共に、幼児の遊び行動にいかなる効果を及ぼすかを検討するために計画された。性的ラベル条件に関して、本実験では接近条件 (Approach: AP) と回避条件 (Avoidance: AV) が設けられた。APの方が的確かつ直接的であり、同性ラベルは被験児の玩具選択に効果があるが、異性ラベルは何の影響ももたらさないという研究結果 (Liebert et al., 1971) を考慮すれば、条件間の単純な比較では、相対的に APの方が性に適切な行動をより多く生起させる可能性がある。しかしながら、Maccoby & Jacklin (1974) の、子どもたちは各性に適した行動に従う方法のみならず、どの行動を避けるべきかということも学習しているという主張にもあるように、

回避ラベルも行動を規制する力を持っている。また、この回避ラベルは性と強い関連性があり、性的ラベリングが男性に対して影響が強いことを Stein et al. (1971) は見出しており、その理由を男性の同性役割に対する好みとが女兒のそれを上回るという事実に求めている。

次に被験者の性の効果について、従来の関連諸研究は男児が女兒より性に適切な玩具での遊びを多くし、逆に不適切な遊びでは男児が少ないことを示しており、その理由を男児への性の型付けの厳しさ、性に不適切な行動に対する罰の強さに帰している (Mussen, 1969など)。また、性役割選択テストで得られた得点も性の要因に近い効力を持つ可能性がある。

以上の研究報告の結果を踏まえ、本実験では次の仮説を検討することにした。3つの要因の独立の効果に関して、APはAVより性に適切*な遊びが多く、不適切**な遊びでは逆転すると予測される (仮説1-1)。次に性差については、性に適切な遊びは男児が多く、不適切な遊びでは女兒が多いであろう (仮説1-2)。性役割選択得点を基に設定された2群 (High Score: HS, Low Score: LS) においては、二者択一的仮説が立てられる。もし性にふさわしいと考えられる特性をより強く備えていることが、遊び行動を支配する主要因であるなら、HS群はLS群より性に適切な遊びを多く出現させ、不適切な遊びでは逆になるであろう (仮説1-3a)。しかしながら、男児に対するラベリングの効果が大きいという主張を生物学的な生活体としての性を越えたものと解釈するなら、HS群男児とLS群女兒のラベリングの効果は大きくなり、そのためHS群とLS群の差は相殺され、性に適切な遊び、性に不適切な遊び共に差異は消失すると考えられる (仮説1-3b)。

*, ** 本実験における性に適切、不適切という言葉は、中性玩具に性ラベルを付するため、本来、性に適切と目される、性に不適切と目されるという表現が正確であるが、以下の記述では一貫して性に適切、不適切という言葉を用いる。また、AV群の性に適切な遊びは不適切でない遊びであり、AP群の不適切な遊びは適切でない遊びという表現が正確である。

* 関西学院大学文学部(現所属金城学院大学短期大学部)

** 関西学院大学文学部

次に各要因間の関連性について、男児の回避的傾向が顕著であれば、ラベル条件と性の間には交互作用が確認されると予測できる(仮説2-1)。また、ラベル条件と選択得点水準間では、ラベル条件の効果がHS群、LS群に等しく作用するため、得点水準の効果とは関係なく、交互作用は示されないであろう(仮説2-2)。最後に、性と選択得点水準との間には、仮説1-3aが支持されれば交互作用が認められず(仮説2-3a)、1-3bが支持されれば反対に認められるであろう(仮説2-3b)。

方 法

被験児: 被験児は名古屋市郊外の幼稚園児4・5才児100名(男女各50名)であった。これらの幼児に対して、まず、性役割選択テスト*(増田・中尾, 1980)を実施し、男女各々適切な性役割選択得点の高い群と低い群を40%ずつ抽出し、男女各40名が本実験に参加した。平均年齢は男児5.81才(SD=0.46)、女児5.66才(SD=0.58)であった。

実験計画: 2(ラベリング条件)×2(性)×2(性役割選択の水準**)の3要因計画法が用いられた。第1の要因であるラベリング条件は、前述の2条件であり、APは一方の玩具に同性ラベルを付し、他方の玩具には何の情報も与えず、AVは逆に異性ラベルを付すという操作であった。

実験材料: 玩具としては、中性玩具である輪投げ(増田ら, 1980など)と木琴(Masters et al., 1979など)各2セットを用い、一方を白色に他方を黄色に着色し、色彩が行動に作用しないように、各群の半数の者は白色玩具に、残りの者は黄色玩具に対してラベルを与えた。また、各ラベラー(男性ラベラー—大学院生、女性ラベラー—大学生)が同色の2種類の玩具を手を持つ上半身の写真(8.0×12.0cm)、計4枚を準備した。

手続: 実験はラベラーとは異なる実験者2名(著者)により施行された。被験児は性役割選択テストを実施した実験者Aにより実験室(幼稚園内の音楽室)に連れて来られ、実験者Bにより次の教示(男児AP、女児AV:

* このテストは、玩具・活動・職業の3つの下位領域から構成されている。成人男女に対しての予備テストをもとに、各領域毎に、男性的から女性的に至る5項目からなる絵カードで、すべての組合せを作り、一対比較法で強制選択をさせるものである。なお、このテストの得点範囲は+60~-60で、正値は男性選択を、負値は女性選択を意味する。

** Ssの性と得点水準を組合せた4群の平均得点は、男児高男性選択群:+28.6、女児高女性選択群:-32.1、男児低男性選択群:+2.6、女児低女性選択群:-4.6であった。

()内は男児AV、女児AP)を受けた。「○○ちゃん、ここに白い輪投げと木琴と、黄色い輪投げと木琴があるでしょ。このおもちゃについて○○ちゃんのお父さん(お母さん)と同じ位の年のこの男(女)の人が〈頑具を持つラベラーの写真を呈示しながら〉、こんなことを言っているから聞いて下さいね。」ここで、あらかじめ録音してあるテープレコーダーにより、ラベラーの「あつ、この白い輪投げと木琴は、野球の道具とか自動車(ままごととセットとかぬいぐるみ)と同じように男(女)の子のおもちゃだ。白のは男(女)の子のだ。」という声を聞かせ、「しばらく自由に遊んで下さいね。」と告げ、その後3分間の行動を観察した。なお、玩具は子どもの前方約30cmの床に置かれ、中央に輪投げ、左右に木琴が一行に、色は交互に配置され、位置と色はカウンターバランスされた。そして観察終了直後に、2種類の頑具の各々についてどちらが好きか選択を求めた。ラベル呈示後と実験終了後に指示した色と性の関係を確認したところ、全被験児共、確認、再確認できた。なおここでは、各性に適切ラベルの色は一方の性に片寄ることのないように各群半々にされ、男性ラベラーは男性ラベルを、女性ラベラーは女性ラベルだけを提供した。

行動観察の方法: 2秒を一単位として、時間見本法で遊び行動を観察し(所要時間が3分間であるため、得点範囲は0~90となる)、①何もしない行動、②どの玩具を見ているか(視線)、③どの玩具に触れるか(接触)、④どの玩具で遊んでいるかの4行動型について記録された。観察は実験者Bが担当し、同時観察による記録をV.T.R.による記録と照合し、修正した。また、実験者Aによる観察が、各群3名計24名に対してV.T.R.を通して施行され、観察者間の信頼性を検討したところ、各観察カテゴリーの平均一致率は92.5%であった。

結 果

1) 各行動型の性に適切・不適切間での比較

何もしない行動は平均2.3%しか生起せず、残りはすべて玩具のために費された。その中でも圧倒的に同性玩具での遊び行動が多く(66.3%)、異性玩具での遊び(18.4%)との間に有意差が認められた($t=8.80$, $df=79$, $P<.001$)。このように、本実験で計画された要因を問わず、性的ラベリングの効果が明示された。なお、視線での差は生じなかった(同性-3.2%, 異性-2.3%)が、接触においては、同性玩具が異性玩具を上回った(6.0%と1.3%, $t=2.94$, $df=79$, $P<.01$)。

性に適切な玩具に対する行動の合計得点について、3要因の分散分析を行ったところ、主効果、交互作用共に

TABLE 1 Group means of sex-appropriate and sex-inappropriate play behaviors

	Boys		Girls	
	Approach	Avoidance	Approach	Avoidance
Sex-appropriate play behaviors				
H. S.	65.5	84.4	52.5	30.9
L. S.	55.9	60.9	67.6	59.4
Sex-inappropriate play behaviors				
H. S.	18.9	2.6	17.4	28.7
L. S.	24.6	20.2	7.5	14.7

Note. H. S. : High Sex Role Preference Scores
L. S. : Low Sex Role Preference Scores

有意ではなかった。

2) 遊び行動について

測定した4行動型のうち最も積極的である遊び行動の各群の平均得点と分散分析の結果はTABLE 1と2に示した。性に適切な遊び行動においては，性の主効果が有意であることが確かめられ，男児は女児より長時間適切玩具で遊んだ。また，性とラベル条件の間に交互作用があり，APでの性差は生じなかったが，AVで男女間に差異が生じ ($F=22.43$, $df=1/72$, $P<.01$)，男児は明らかに回避的であった。女児の条件間にも差があり，APが高いことが明らかになった ($F=6.59$, $df=1/72$, $P<.05$)。さらに，性と性役割選択得点水準の間に有意な交互作用がみられ，LS群に性差はないが，HS群の場合，男児は女児に比べより長く遊ぶことを示した。下位検定の結果，HS群に性差が ($F=32.80$, $df=1/72$, $P<.01$)，男児のLS, HS群間 ($F=8.13$, $df=1/72$, $P<.01$)，女児のLS, HS群間 ($F=14.10$, $df=1/72$, $P<.01$) にそれぞれ有意差を見出した。

TABLE 2 Analysis of variance on TABLE 1

	Sex-appropriate play			Sex-inappropriate play		
	df	MS	F	df	MS	F
Sex (S)	1	3962.04	5.88*	1	5.00	<1
Role(R)	1	43.52	<1	1	0.05	<1
Labeling (L)	1	137.82	<1	1	8.45	<1
S×R	1	3604.69	5.35*	1	1920.80	2.80†
S×L	1	7353.69	10.91**	1	2780.25	4.05*
R×L	1	275.94	<1	1	120.05	<1
S×R×L	1	655.91	<1	1	180.00	<1
Error	72	674.21		72	687.12	

† $P<.10$, * $P<.05$, ** $P<.01$

性に不適切な遊び行動では，主効果はなかったが，ラベル条件と性の間の交互作用は有意であり，性と役割得点の間では傾向が現われた。前者は，男児ではAPで，女児ではAVでより多く出現し，後者は，男児ではLS群が大で，女児ではHS群が大であった。性に適切な遊び行動で見られた性差は，ここでは生じなかったが，交互作用（傾向を含む）は同じ要因間で現われた。つまり，交互作用が示されたレベル条件と性の間，性と役割得点の間では全く反対の様相を呈しているが，全体として適切な遊びと完全に鏡映的とはならなかった。

3) 玩具選択

行動観察終了後の好みによる玩具選択は，観察結果と深い関連性が予想されるので，2)で有意差が認められた点を中心に検討した。同性玩具を一貫して選んだ者と，それ以外の者——少なくとも一方が異性玩具であった者——とを比較したところ，性の効果 ($\chi^2=7.20$, $df=1$, $P<.01$) が確認され，男児が同性玩具を好むという事実が明らかになった。また，ラベル条件と性の間の交互作用が有意であり ($\chi^2=12.00$, $df=3$, $P<.01$)，男児はAVでより適切玩具を好む傾向がみられた ($\chi^2=3.60$, $df=1$, $P<.10$)。

考 察

すべての群で性に適切なラベルを付した玩具に費された時間はチャンスレベルを越えており（平均75.5%），明らかに性的ラベリングの効果が実証された。

次に，実験に先だって予測された仮説に従って考察を進めていく。まず，接近 (AP)，回避 (AV) というラベル条件に関する予測（仮説1—1）は否定され，両条件の差異は生じなかった。しかし，仮説2—1が部分的に支持され，ラベリング条件と性との間の交互作用が有意であり，回避ラベルが男女に異なって働き，男児は女児に比

べ明らかに回避的であった。男児の回避傾向に関しては過去の研究と一致しており，女児ではAPの方が効果的であったが，男児はAVを下回っている。こうしたことから，予測を越える程，男児（特にHS群）は異性ラベルに対して回避的であることが明白になった。性に不適切な遊びでは交互作用だけが有意であり，全体として条件差は示されず，ラベル条件の圧力が男女で逆転した。役割選択得点との関係については，ラベル条件の効果に関わりなく仮説2—2が支持された。

仮説1—2の前半部分，すなわち男児の性に適切な遊びは多いであろうという仮説は支

持され、男児の方が性に適切な行動をより早く、しかも明確に限定されているという Mussen (1969) の主張と本結果は一致している。ラベリング効果が男児に強く反映されたとも考えられ、男児の方が性的ラベリングという社会的刺激に対して敏感であることを示唆している。ここではラベルを付された適切玩具で男児がより多く遊んだ(遂行)が、選択テストの段階では女児の方がむしろ適切選択を多く示していた(男児 $-+14.2$, 女児 -19.6)。こうした選択と遂行の関係について Montemayor (1974)は、選択において男児は同性選択を多く示すが、女児は同性・異性を等しく選択し、性的ラベルが付された時には両性共自己の性と一致するように遂行するという見解を表明しているが、ここでの結果はこうした主張とは相反するものであった。このような傾向は選択、遂行の両面に波及しており、この原因についての明確な解釈は困難である。しかし、対象児の年齢の差異がその一助となるかもしれない。Montemayorの用いた被験児は本実験の子どもより平均約1才年長(小学校1・2年生で、6.8歳)であり、選択テストの6才児の結果(増田ら, 1980)が彼の主張を裏付けていることを考慮すれば、性的ラベリングの効果には、幼児と児童の間に違いがあり、幼児期に関しては女児に対する効果が弱いのかも知れない。ところが、不適切な遊び行動で逆の結果は得られず、男女共にほぼ同様の値を示した。これまで行われた研究では女児の男性的遊び行動を認める場合が多い(Wolf, 1975, 1976など)が、それらは異性的遊び行動を観察させる事態を設定しているため、本研究のように同性役割を中心とした実験とは根本的に異なり、一概に比較はできない。

また、性役割選択得点の水準の効果に関しては、2つの仮説のうち1-3bが支持され、ラベルを付された遊び行動の規定因は、その性にふさわしい特徴を強く有しているということではないと明示された。より詳細に検討するためには、性との交互作用を考慮した方が理解し易い。仮説2-3bが立証されたことは、Stein et al. (1971)の主張を、男児或は男性的であることが性的ラベリングの効果の重要な要因であると拡大解釈しうる可能性を示唆している。

以上の行動観察で得た結果は、玩具の好みと強い関連性のあることが示唆されており、遊び行動において女児よりその適切度が高い男児は、同性ラベル玩具をより多く選択している。また、ラベル条件と性との交互作用に関しても、遊びの適切性と玩具選択の連続性が確認された。ただ、最も深い関わりがあると考えられる性役割選択得点との間に有意差がなかったため、性と選択得点

の交互作用は示されなかった。

最後に、本実験は付随的に Wolf (1973, 1975, 1976)の一連の性に不適切な遊び行動に関する研究におけるモデル評価との比較を意図しており、そのためにラベラーの魅力について5段階評価を求めた。女児の評価がやや高く(男児 $=3.25$, 女児 $=3.55$)、彼の結果(1975, 1976)と近いが、有意には至っていない。V.T.R.または現実のモデルに接する事態と、写真と声によりラベルを付すという操作の違いが、こうした正或は負の感情を引き起こすことのない中間的評定への集中を促進させたと考えられる。

付記

本論文を作成するにあたっては、関西学院大学文学部 武田正信教授に御指導をいただいた。ここに深く感謝の意を表します。

引用文献

- Liebert, R. M., McCall, R. B., & Hanratty, M. A. 1971 Effects of sex-typed information on children's toy preferences. *Journal of Genetic Psychology*, 119, 136.
- Maccoby, E., & Jacklin, C. 1974 *The psychology of sex differences*. Stanford: Stanford University Press.
- 増田公男・中尾忍 1980 幼児・児童の性役割選択に関する再検討 関西学院大学文学部教育学科年報 6, 9-14.
- Masters, J. C., Ford, M. E., Arend, R., Grotevant, H. D., & Clark, L. V. 1979 Modeling and labeling as integrated determinants of children's sex-typed imitative behavior. *Child Development*, 50, 364-371.
- Montemayor, R. 1974 Children's performance in a game and attraction to it as a function of sex-typed labels. *Child Development*, 45, 152-156.
- Mussen, P. 1969 Early sex-role development. In D. A. Goslin (Ed.), *Handbook of socialization theory and research*. Chicago: Rand McNally College Publishing Company.
- Stein, A. H., Pohly, S., & Mueller, E. 1971 The influence of masculine, feminine, and neutral tasks on children's achievement behavior, expectancies of success, and attainment values. *Child Development*, 42, 195-207.
- Thompson, S. T. 1975 Gender labels and early sex

- role development. *Child Development*, **46**, 339-347.
- Wolf, T. 1973 Effects of live modeled sex-inappropriate play behavior in a naturalistic setting. *Developmental Psychology*, **9**, 120-123.
- Wolf, T. 1975 Response consequences to televised modeled sex-inappropriate play behavior. *Journal of Genetic Psychology*, **127**, 35-44.
- Wolf, T. 1976 Effects of live adult modeled sex-inappropriate play behavior in a naturalistic setting. *Journal of Genetic Psychology*, **128**, 27-32.
- (1980年4月5日受稿)